

犯罪不安と地域への愛着が防犯ボランティアの動機
づけに与える影響：
防犯ボランティア10年以内群と防犯ボランティア11
年以上群との比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 泰之, 大久保, 智生, 久保田, 真巧, 白松, 賢, 岡田, 涼 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028802

研究論文

犯罪不安と地域への愛着が防犯ボランティアの動機づけに与える影響

防犯ボランティア 10 年以内群と防犯ボランティア 11 年以上群の比較

金子 泰之 (静岡大学 教職センター)

大久保 智生(香川大学 教育学部)

久保田真巧(関西学院大学 教職教育研究センター)

白松 賢(愛媛大学 教育学研究科)

岡田 涼(香川大学 教育学部)

要約：防犯ボランティアへの参加動機づけを高める要因を検討することを本研究の目的とした。具体的には、防犯ボランティアへの参加動機づけは、犯罪不安のようなネガティブな情報によって高められるのか、それとも、自分自身が住んでいる地域への愛着といったポジティブな要因によって動機づけが高められるのかを検討した。

香川県内の防犯ボランティア代表者および地域安全推進委員会長 265 名が研究協力者であった。防犯ボランティア歴 10 年以内の群と 11 年以上の群に分けて分析を行なった。

その結果、防犯ボランティア歴 10 年以内の群では、地域への愛着が防犯ボランティア動機づけを高めていたのに対し、11 年以上の群では、地域への愛着だけでなく犯罪への不安も防犯ボランティア動機づけを高めていた。防犯ボランティア歴をふまえて動機づけを高めるための取り組みが防犯ボランティア活性化には必要であることが示唆された。

キーワード：防犯、防犯ボランティア、防犯教育、地域への愛着、犯罪不安

1. 問題と目的

防犯ボランティアの現状と課題 「防犯ボランティアは、個人や団体による防犯を目的とした自主的な活動であり、自主防犯活動等とも称される(荒井, 2017)。」

防犯ボランティア団体の活動状況等についての統計(警察庁, 2020)を見ていくと、防犯ボランティア団体数は、2003 年 : 3056 団体、2004 年 : 8079

団体、2005 年 : 19515 団体、2006 年 : 31931 団体、2007 年 : 37774 団体となっている。2003 年から 2006 年までに団体数が急増している。2006 年以降は、ゆるやかに増加し、2015 年の 48060 団体をピークに、2019 年には 46135 団体とやや減少傾向にある。防犯ボランティアに参加する構成員数も、防犯ボランティアの団体数と類似した推移を示している(警察庁, 2020)。2003 年から 2006 年頃までに防犯ボランティア団体数が急増した理由について荒井(2017)は、3 つの理由を挙げている。1 つ目は、90 年代後半から 2000 年前半にかけての一般刑法犯認知件数の急増である。2 つ目は、2005 年頃に奈良県、広島県、栃木県で相次いだ子どもが被害者となった犯罪とそれにともなう犯罪被害不安の高まりである。3 つ目は、犯罪対策閣僚会議(2008)において、犯罪に強い社会実現のための行動計画に防犯ボランティア推進が盛り込まれたことである。90 年代後半から 2000 年代前半の社会状況・犯罪状況が、防犯ボランティア団体数増加に影響を与えたと言えるだろう。

防犯ボランティア団体の構成員の平均年代を見していくと、60 代(48.8%)、70 代(21.1%)となっており、60 代と 70 代を合わせると 69.9% となっている(警察庁, 2020)。構成員の大半を高齢者が占めていることがわかる。

防犯ボランティアの活動内容としては、防犯パトロール(76.2%)、子供保護・誘導(通学路)(71.4%)、危険箇所点検(38.0%)、防犯広報(33.2%)、子ども保護・誘導(通学路以外)(32.7%)、防犯パトロール(自転車)(31.2%) などが割合の高いものであり、割合の低いものとして被害詐欺防止(寸劇等)

(2.7%) となっている（警察庁, 2020）。防犯ボランティアの活動内容は多岐にわたっている。

防犯ボランティアの活動を開始した一番の理由は“まちづくり（70.1%）”であり、防犯ボランティア団体が抱えている問題点は、“参加者の高齢化（70.6%）”，“仕事や家事との両立（40.1%）”が挙げられている（小俣・島田・羽生・原田, 2009）。防犯ボランティアに関わる構成員の高齢化や地域防犯ボランティアに対する無関心などの課題もあり（桐生, 2015），自主的活動である防犯ボランティア活動をどう維持するのかを考える必要がある。

犯罪不安と防犯ボランティア動機づけ 防犯ボランティアの活動が中断された理由を見していくと、活動のマンネリ化や意欲の低下など、動機の低下、活動意欲の低下（小俣・芝田・浅川・羽生・原田, 2011）が指摘されている。個人や団体による防犯を目的とした自主的活動である防犯ボランティアにとって重要なのは、無理なく活動を継続させることである。防犯ボランティアの活動に関わっている構成員の防犯ボランティアに対する動機づけを高める要因を明らかにする研究が求められる。

防犯ボランティアに対する動機づけに影響する要因の1つとして、犯罪不安が挙げられる。永房（2008）は、20歳以上の男女を対象に、犯罪被害不安と防犯対策の関係、犯罪被害不安と防犯活動への参加意欲の関係を分析している。具体的には、犯罪被害不安の得点から対象者を、低群、中群、高群の3群に分けて、個人が行っている防犯対策（例：鍵をかけるなど戸締りを厳重にする。）と防犯活動への参加意欲（例：地域住民による自主的な防犯活動に参加したいと思いますか。）をクロス集計している。結果を見ると、犯罪被害不安低群よりも、犯罪被害不安中群と高群は、“防犯グッズなどで身を守る”，“防犯グッズなどで身を守る”，“危ない場所に近づかない”などの防犯対策をしている割合が高かった。また、犯罪被害不安低群と中群よりも、犯罪被害不安高群は“自主的な防犯活動に参加したい・どちらかといえば参加したい”と回答している割合が高かった。この結果から、犯罪への不安や犯罪被害に対する不安が、個人の防犯対策行動や地域における防犯活動を促進すると考えられる。子育て中の女性を対象に調査して得られた結果

（荒井・藤・吉田, 2010）においても、社会の治安に対する不安は、地域の見回りや危険箇所の把握などの防犯行動を促すことが明らかとなっている。これらの先行研究の対象者は、20歳以上の男女（永房, 2008）や3歳から12歳までの子どもを持つ母親（荒井・藤・吉田, 2010）の結果である。防犯ボランティアに関わる構成員においても同様に、防犯ボランティア構成員が感じている犯罪への不安や犯罪被害への不安が、防犯活動を促すのかは検討する必要があるだろう。

地域への愛着と防犯ボランティア動機づけ 犯罪被害不安や治安悪化などの要因だけが防犯対策や防犯行動を促進するのだろうか。防犯ボランティアの活動を開始した理由に、“まちづくり（70.1%）”が挙げられている（小俣・島田・羽生・原田, 2009）。防犯ボランティアを立ち上げるときには、防犯だけでなく、まちづくりという地域全体に対する問題意識にもとづいていると言えるだろう。15歳以上の男女を対象に、コミュニティ意識と市民参加の関係を分析した研究（石盛, 2004）では、地域への愛着は、自治会・町内会・趣味の集まりなどの地域活動への参加を促すことが明らかになっている。また、ボランティア経験の有無によってコミュニティ意識得点に違いがあるのかを比較すると、コミュニティ意識4因子すべてにおいて差が見られ、ボランティア経験有の群の地域への愛着得点が高かった（石盛, 2004）。居住する地域への愛着の高さが、地域活動や社会活動への参加を促すことが示唆される。しかし、コミュニティ意識と市民参加の関係を分析した知見（石盛, 2004）を防犯ボランティアに結びつけると2つの課題が見えてくる。

1つ目は、対象者が15歳以上の男女となっている点である。防犯ボランティア活動に関わる構成員においても同様に、防犯ボランティアの構成員が地域に抱く愛着が防犯ボランティアへの参加を促すのかどうかを検討する必要がある。2つ目は、社会活動の指標の1つであるボランティアは、広い意味でのボランティアを捉える指標になっている点である。ボランティアの内容を防犯活動に絞り、防犯ボランティアを指標にしたときにも、地域への愛着が防犯ボランティアへの参加を促すような結果が見られるのかを検討する必要がある。

本研究の目的 本研究では、防犯ボランティアの活動に関わる構成員を対象に調査を行う。そして、犯罪不安と地域への愛着が、防犯ボランティアへの参加動機づけに対してどのような影響を与えるのかを検討する。そして、防犯ボランティアの活動を継続していくためにどのような取り組みが防犯ボランティアの動機づけを高め、防犯ボランティアの活動が活性化していくことにつながるのかを考察することを目的とする。

2. 方法

調査対象者と手続き

香川県内の防犯ボランティア団体代表者および地域安全推進委員会長 361 名に対して郵送調査を実施した。その結果、265 名(男性 243 名、女性 19 名、不明 3 名)の有効回答を得た。

年齢の平均は 70.34 歳($SD=9.99$)、ボランティア歴の平均は 15.48 年($SD=10.81$)であった。最年少が 37 歳であり、最年長は 90 歳であった。

年齢層別で見していくと、30 代:2 名、40 代:15 名、50 代:18 名、60 代:69 名、70 代:120 名、80 代:39 名、90 代:1 名、不明:1 名であった。

分析項目

防犯ボランティアとして活動している具体的な活動内容 防犯ボランティアとして活動に関わっている具体的な内容を複数選択肢で回答を求めた。「あなたは現在、どのような防犯ボランティアの活動をされていますか。あてはまるところ全てに記入あるいはチェックを入れてください。」という教示文を提示し、「防犯広報」、「防犯パトロール」、「危険箇所点検」、「防犯教室・講習会」、「防犯指導・診断」、「環境浄化」、「子ども保護誘導」、「乗り物盗予防」、「放置自転車対策」、「駐車場・駐輪場警戒」、「地域安全マップ作成」、「高齢者世帯訪問」、「特殊詐欺被害防止活動」、「その他(自由記述)」の 14 の選択肢から選んでもらった。

防犯ボランティアへの参加動機項目 坂野・矢嶋・中嶋(2004)の Volunteer Function Inventory 尺度(VFI 尺度)の 5 因子、25 項目を用いた。VFI 尺度は、ボランティア活動から得られる利益を測定する尺度として作成されたものである。各因子を構成する具体的な項目を 3 項目ずつ以下に示した。

第 1 因子の感情的安寧は、“私がどんな嫌な気分のときでもボランティア活動はそれを忘れさせてくれる”, “ボランティア活動をすることで、あまりさみしさを感じないですむ”, “ボランティア活動を行うことで、他の人よりも恵まれていることへの罪悪感がいくぶん和らぐ” 等の項目から構成されていた。

第 2 因子の利他主義は、“私は、自分よりも恵まれていない人々のことが気になる”, “私は、自分が直接ボランティアで関わっている人たちのことが、とても気になる”, “自分は、困っている人々をみると気の毒に思う” 等の項目から構成されていた。

第 3 因子の社会的つながりは、“自分の友達はボランティア活動に参加している”, “友人は、私がボランティア活動に参加することを望んでいる”, “私の知っている人々は、地域での助け合いに関心が高い” 等の項目から構成されていた。

第 4 因子の知識の習得は、“ボランティア活動を行うことで、自分が取り組んでいることをさらに深めることができる”, “ボランティア活動によって、ものごとについての新たな考え方方が得られる”, “ボランティア活動からは、直接的な体験を通して、さまざまなことが学べる” 等の項目から構成されていた。

第 5 因子の自尊心の高揚は、“ボランティア活動は自分の大切さに気づかせてくれる”, “ボランティア活動は自尊心を高めてくれる”, “ボランティア活動は、自分が必要とされていることを実感させてくれる” 等の項目から構成されていた。

VFI 尺度は 6 因子によって構成されているが、防犯ボランティア活動を検討するにあたり、「職業上の成功 (e.g.ボランティア活動は、私がなりたい職業に挑戦するきっかけをつくってくれる)」は調査目的にそぐわないため削除した。

「あなたはなぜ防犯ボランティアをしようと思いましたか? あてはまる数字に○をつけてください。」という教示文を提示し、回答形式は「いいえ」(0 点)、「どちらでもない」(1 点)、「はい」(2 点)の 3 件法で尋ねた。

犯罪に対する感情 荒井・藤・吉田(2010)の犯罪に対する感情的反応のうち、上位 3 項目を使用した。感情的反応は、“社会全体(地域)の治安に対

して不安を感じる”, “世の中(地域)で起こる犯罪に対して不安を感じる”, “社会(地域)の安全性に対してなんとなく不安を感じる”などの項目から構成されていた。「あなたがお住まいの地域のことについてお答えください。以下の質問に対して、当てはまる数字に○を1つ、つけてください。」という教示文を提示し、回答形式は、そう感じない(1点)、あまりそう感じない(2点)、ややそう思う(3点)、そう思う(4点)までの4件法で回答を求めた。

地域への愛着 鈴木・藤井(2008)の地域愛着尺度を用いた。この尺度は、地域愛着(選好)、地域愛着(感情)、地域愛着(持続願望)の3因子から構成されている。このうち、地域愛着(選好)上位3項目と地域への愛着(感情)上位3項目、計6項目を使用した。

選好に関する3項目は、“地域は住みやすいと思う”, “地域にお気に入りの場所がある”, “地域を歩くのは気持ちよい”であった。

感情に関する3項目は“地域は大切だと思う”, “地域に自分の居場所がある”, “地域にずっと住み続けたい”であった。

「あなたがお住まいの地域のことについてお答えください。以下の質問に対して、当てはまる数字に○を1つ、つけてください。」という教示文を提示し、回答形式は、そう思わない(1点)、あまりそう思わない(2点)、ややそう思う(3点)、そう思う(4点)までの4件法で回答を求めた。

倫理的配慮 アンケート用紙への回答は、自由意思にもとづいており、回答したくない場合は回答しなくても良いこと、回答しないことによる不利益はないことを伝えた。また、アンケートは無記名で行うことも伝えた。無記名で行われるアンケート調査のため、個人が特定されることはないことを伝えた。

アンケート用紙を回収する際は、調査協力者に封筒を配布した。そして、その中に回答済みのアンケート用紙を入れ、封を閉じてもらった上で返送してもらった。これは、回答した内容が他者に見られることで、個人の不利益とならないようするためであった。得られた結果は研究以外の目的では使用されないことを伝えた。

3. 結果

防犯ボランティア歴別の比較

まず、防犯ボランティアをどれくらい続いているのか、その防犯ボランティア歴による認識に違いがあるのかどうかを検討した。

防犯ボランティア歴をもとに、0~5年以内、6年から10年以内、11年以上の3群に分けた。人数の内訳は、0~5年以内の群は49名、6年から10年以内の群は63名、11年以上の群は143名であった。

防犯ボランティア歴3群と年代によるクロス集計により、人数の内訳を表1に示した。防犯ボランティア歴と年齢の相関係数は.409($p<.01$)であった。

表1 防犯ボランティア歴3群と年代によるクロス集計

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計
ボランティア歴5年以内	2	9	5	19	12	2	0	49
ボランティア経験5年から10年以内	0	5	6	15	29	7	0	62
ボランティア経験10年以上	0	0	5	33	74	30	1	143
合計	2	14	16	67	115	39	1	254

防犯ボランティア歴によって分類した3群ごとに、ボランティア参加動機づけ得点、犯罪不安得点、地域への愛着得点を比較した(表2)。

表2 ボランティア歴別の平均値の比較 ()内は標準偏差

	①防犯ボランティア歴5年以内	②防犯ボランティア歴6年から10年以内	③防犯ボランティア歴11年以上	F値	多重比較
感情的 安寧	4.06(2.21)	4.20(2.32)	5.17(2.16)	$F(2,238)=6.66**$	③>②, ①
利他 主義	6.29(2.30)	6.66(2.00)	7.10(1.80)	$F(2,233)=3.33*$	③>②, ①
社会的な つながり	6.49(2.41)	6.81(2.21)	7.38(2.09)	$F(2,232)=3.43*$	③>②, ①
知識の 習得	7.33(2.25)	7.28(2.15)	7.79(2.04)	$F(2,239)=1.61$	
自尊心の 高揚	6.40(2.42)	6.44(2.21)	6.87(2.13)	$F(2,237)=1.23$	
犯罪への感情 (不安)	2.50(0.78)	2.48(0.75)	2.55(0.78)	$F(2,245)=0.25$	
地域愛着 (選好)	3.39(0.50)	3.27(0.59)	3.34(0.59)	$F(2,245)=0.63$	
地域愛着 (感情)	3.61(0.50)	3.70(0.45)	3.72(0.43)	$F(2,247)=0.97$	

** $p<.01$, * $p<.05$

ボランティア参加動機づけのうち、感情的安寧($F(2,238)=6.66, p<.01$)、利他主義($F(2,233)=3.33, p<.05$)、社会的つながり($F(2,232)=3.43, p<.05$)で有意差が見られた。

多重比較の結果、防犯ボランティア歴5年以内の群と防犯ボランティア歴10年以内の群よりも、防犯ボランティア11年以上の群の得点が高かった。防犯ボランティア歴11年以上の群は、ボランティア活動への参加動機づけが高いことが明らかとな

った。

防犯ボランティア歴11年以上の群のボランティア参加動機得点が顕著に高かったため、防犯ボランティア10年以内の群と、防犯ボランティア11年以上の2つの群に分けて、以下の分析を行うこととした。防犯ボランティア歴別の性差内訳を以下に示した（表3）。

表3 防犯ボランティア歴×性別のクロス集計（人数）

防犯ボランティア歴		合計
10年以内	11年以上	
男性	99	134
女性	10	9
合計	109	143
		252

男性の内訳は、防犯ボランティア歴10年以内（99名、42.5%）、防犯ボランティア歴11年以上（134名、57.5%）であり、防犯ボランティア歴11年以上の割合がやや高かった。

女性の内訳は、防犯ボランティア歴10年以内（10名、52.6%）、防犯ボランティア歴11年以上（9名、47.4%）であり、防犯ボランティア歴10年以内の割合がやや高かった。

次に、防犯ボランティア歴2群別に、具体的な活動の有無についての人数と割合を示した（表4から表16）。

表4 防犯広報

		合計
	活動していない	活動している
ボランティア歴10年以内	88	24
	78.6%	21.4%
ボランティア歴11年以上	96	47
	67.1%	32.9%
合計	184	71
		255

表5 防犯パトロール

		合計
	活動していない	活動している
ボランティア歴10年以内	21	91
	18.8%	81.3%
ボランティア歴11年以上	30	113
	21.0%	79.0%
合計	51	204
		255

表6 危険箇所点検

		合計
	活動していない	活動している
ボランティア歴10年以内	79	33
	70.5%	29.5%
ボランティア歴11年以上	74	69
	51.7%	48.3%
合計	153	102
		255

表7 防犯教室・講習会

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	98	14	112
	87.5%	12.5%	100%
ボランティア歴11年以上	112	31	143
	78.3%	21.7%	100%
合計	210	45	255

表8 防犯指導・診断

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	109	3	112
	97.3%	2.7%	100%
ボランティア歴11年以上	132	11	143
	92.3%	7.7%	100%
合計	241	14	255

表9 環境浄化

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	91	21	112
	81.3%	18.8%	100%
ボランティア歴11年以上	110	33	143
	76.9%	23.1%	100%
合計	201	54	255

表10 子ども保護誘導

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	62	50	112
	55.4%	44.6%	100%
ボランティア歴11年以上	75	68	143
	52.4%	47.6%	100%
合計	137	118	255

表11 乗り物盗予防

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	111	1	112
	99.1%	0.9%	100%
ボランティア歴11年以上	133	10	143
	93.0%	7.0%	100%
合計	244	11	255

表12 放置自転車対策

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	111	1	112
	99.1%	0.9%	100%
ボランティア歴11年以上	119	24	143
	83.2%	16.8%	100%
合計	230	25	255

表13 駐車場・駐輪場警戒

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	109	3	112
	97.3%	2.7%	100%
ボランティア歴11年以上	133	10	143
	93.0%	7.0%	100%
合計	242	13	255

表14 地域安全マップ作成

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	102 91.1%	10 8.9%	112 100%
ボランティア歴11年以上	111 77.6%	32 22.4%	143 100%
合計	213	42	255

表15 高齢者世帯訪問

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	93 83.0%	19 17.0%	112 100%
ボランティア歴11年以上	110 76.9%	33 23.1%	143 100%
合計	203	52	255

表16 特殊詐欺被害防止活動

	活動していない	活動している	合計
ボランティア歴10年以内	101 90.2%	11 9.8%	112 100%
ボランティア歴11年以上	117 81.8%	26 18.2%	143 100%
合計	218	37	255

ボランティア歴10年以内の群よりも、ボランティア歴11年以上の群の方が活動していると回答した割合がやや高いのは、危険箇所点検（表6）、放置自転車対策（表12）、地域安全マップ作成（表14）、特殊詐欺被害防止活動（表16）であった。防犯ボランティア歴の長短によって、活動しやすい防犯ボランティア、活動しにくい防犯ボランティアがあると考えられる。

防犯パトロール（表5）、子ども保護誘導（表10）の活動している割合は、防犯ボランティア歴10年以内と11年以上で大きな差は見られなかった。防犯ボランティア歴の長短に関係なく、活動している割合がほぼ同水準の防犯ボランティア活動もあることが明らかとなった。

防犯ボランティアとして具体的に関わっている内容に、“その他”として自由記述で回答された内容を見ていく。防犯ボランティア10年以内群と11年以上群に分けて、その内訳である人数を記載した。

110番キャンペーン（10年以内：0名、11年以上：1名）、あいさつ運動・保護司運動（10年以内：0名、11年以上：1名）、ゴミ不法投棄パトロール（10年以内：1名、11年以上：1名）、パトロール（10年以内：0名、11年以上：1名）、挨拶運動（10年以内：1名、11年以上：1名）、安全パトロール

（10年以内：0名、11年以上：1名）、交通キャンペーン・交通安全キャンペーン（10年以内：1名、11年以上：2名）、交通安全活動・交通安全指導（10年以内：0名、11年以上：2名）、交通指導（10年以内：0名、11年以上：1名）、高齢者利用サロン訪問（10年以内：1名、11年以上：0名）、子ども見守り活動（10年以内：1名、11年以上：0名）、子供安全パトロール・青パト（10年以内：1名、11年以上：0名）、子供会活動等へ護身術レクチャー・登下校時の見守り活動（10年以内：0名、11年以上：1名）、子供見守隊（10年以内：0名、11年以上：1名）、児童との交流（10年以内：0名、11年以上：1名）、児童と一緒に毎朝学校までついていく（10年以内：0名、11年以上：1名）、児童生徒の登下校見守り活動・通学時の見学（10年以内：4名、11年以上：1名）、自治会長（10年以内：0名、11年以上：1名）、青パト講習会（10年以内：0名、11年以上：1名）、早朝パトロール（10年以内：0名、11年以上：1名）、地域安全推進・地域安全推進委員（10年以内：0名、11年以上：3名）、地域安全全般（10年以内：0名、11年以上：1名）、地区パトロール（10年以内：0名、11年以上：1名）、登下校見守り活動及び不安要因の共有等（10年以内：1名、11年以上：0名）、保護司・社会を明るくする運動（10年以内：1名、11年以上：0名）、暴排活動（10年以内：1名、11年以上：0名）、毎朝小学生に挨拶している（10年以内：0名、11年以上：1名）、等であった。

防犯活動が、多岐にわたっていることと、防犯ボランティア歴11年以上の群において、活動の幅が広いことが窺えた。

犯罪への感情（不安）と地域への愛着（選好、感情）が防犯ボランティアへの参加動機づけに及ぼす影響：まず、防犯ボランティア10年以内群と11年以上群について、以下の分析で用いるすべての変数の平均値と標準偏差を示した（表17）。

次に、防犯ボランティア10年以内群と11年以上群、それについて、各変数間のPearsonの相関係数を示した。ボランティア歴10年以内の群の相関係数を表18に、ボランティア歴11年以上の群の相関係数を表19に示した。

表17 ボランティア歴別の平均値と標準偏差

	①防犯ボランティア 歴10年以内	②防犯ボランティア歴 11年以上
感情的 安寧	4.14(2.26)	5.17(2.16)
利他 主義	6.49(2.14)	7.10(1.80)
社会的な つながり	6.66(2.30)	7.38(2.09)
知識の 習得	7.30(2.19)	7.79(2.04)
自尊心の 高揚	6.42(2.29)	6.87(2.13)
犯罪への感情 (不安)	2.48(0.76)	2.55(0.78)
地域愛着 (選好)	3.32(0.55)	3.34(0.59)
地域愛着 (感情)	3.66(0.47)	3.72(0.43)

()内が標準偏差

表18 ボランティア歴10年以内の群の各変数の相関係数

	利他主義	社会的な つながり	知識の 習得	自尊心 の高揚	犯罪への 感情(不安)	地域への 愛着(選好)	地域への 愛着(感情)
感情的安寧	.543**	.500**	.463**	.549**	.126	.083	.140
利他主義	—	.585**	.515**	.456**	.187	.243*	.348**
社会的なつながり	—	—	.513**	.591**	.116	.261**	.372**
知識の習得	—	—	.749**	—	.080	.310**	.416**
自尊心の高揚	—	—	—	.104	—	.193*	.303**
犯罪への感情(不安)	—	—	—	—	.042	—	.151
地域への愛着(選好)	—	—	—	—	—	.588**	—
地域への愛着(感情)	—	—	—	—	—	—	—

**p<.01 *p<.05

表19 ボランティア歴11年以上の群の各変数の相関係数

	利他主義	社会的な つながり	知識の 習得	自尊心 の高揚	犯罪への 感情(不安)	地域への 愛着(選好)	地域への 愛着(感情)
感情的安寧	.521**	.477**	.535**	.655**	.126	.223*	.297**
利他主義	—	.489**	.473**	.501**	.139	.218*	.218*
社会的なつながり	—	.476**	.553**	—	.089	.261**	.329**
知識の習得	—	—	.763**	.231**	.293**	—	.380**
自尊心の高揚	—	—	—	.186*	.258**	.281**	—
犯罪への感情(不安)	—	—	—	—	-.028	.067	—
地域への愛着(選好)	—	—	—	—	—	.641**	—
地域への愛着(感情)	—	—	—	—	—	—	—

**p<.01 *p<.05

次に、犯罪への感情(不安)と地域への愛着(選好、感情)が防犯ボランティアへの参加動機づけに及ぼす影響を検討した。犯罪への感情と地域への

愛着を独立変数とし、防犯ボランティアへの参加動機づけを従属変数とした重回帰分析(強制投入法)を行なった。

防犯ボランティア歴の2群に分けて、分析した。防犯ボランティア10年以内(表20)と防犯ボランティア11年以上(表21)に示した。

防犯ボランティア歴10年以内群の結果：表20を見ると、利他主義、社会的なつながり、知識の習得、自尊心の高揚の4つで有意な差が見られた。

表20 犯罪への感情と地域への愛着が防犯ボランティア動機に与える影響(防犯ボラ10年以内)

	感情的安寧	利他主義	社会的な つながり	知識の 習得	自尊心の 高揚
犯罪への感情(不安)	.11	.15	.07	.03	.06
地域への愛着(選好)	.01	.07	.06	.10	.03
地域への愛着(感情)	.11	.28*	.32**	.35**	.27*

p<.01, *p<.05 R²=.00 R²=.12 R²=.12** R²=.15** R²=.06*

防犯ボランティア10年以内の群では、地域への愛着(感情)が、4つの参加動機づけに正の影響を及ぼしていた。

防犯ボランティア歴10年以内の群の場合、地域は大切だ、地域に自分の居場所がある、地域にずっと住み続けたいといった、地域に対するポジティブな愛着が参加動機づけを促進することが明らかとなった。

防犯ボランティア歴11年以上群の結果：表21を見ると、感情的安寧と社会的なつながりには、地域への愛着(感情)が正の影響を及ぼしていた。知識の習得には犯罪への感情(不安)と地域への愛着(感情)が知識の習得に正の影響を及ぼしていた。自尊心の高揚には犯罪への感情(不安)が正の影響を及ぼしていた。

表21 犯罪への感情と地域への愛着が防犯ボランティア動機に与える影響(防犯ボラ11年以上)

	感情的安寧	利他主義	社会的な つながり	知識の 習得	自尊心の 高揚
犯罪への感情(不安)	.11	.13	.08	.21*	.17*
地域への愛着(選好)	.08	.15	.10	.11	.15
地域への愛着(感情)	.24*	.11	.26*	.30**	.17

p<.01, *p<.05 R²=.08 R²=.05* R²=.10** R²=.17** R²=.10**

防犯ボランティア歴11年以上の群の場合、2つの変数が防犯ボランティアへの参加動機づけを促進していた。

1つ目は、地域の治安に対して不安を感じる、地域で起こる犯罪に対して不安を感じるといった犯

罪被害への不安であった。2つ目は、地域は大切だと思う、地域に自分の居場所があるといった地域に対するポジティブな愛着であった。防犯ボランティア歴11年以上の群は、犯罪被害への不安と地域への愛着の2つが、防犯ボランティアへの参加動機づけを促進することが明らかとなった。

4. 考察

本研究で明らかになったことへの考察 防犯ボランティアへの参加動機づけを高める要因を検討することを本研究の目的とした。本研究では、防犯ボランティアへの参加動機づけに影響を与える要因として2つに焦点を当てた。

1つ目は、犯罪に対する不安であった。2つ目は、地域への愛着であった。そして、防犯ボランティアへの参加動機づけは、犯罪不安のようなネガティブな情報によって高まるのか、それとも、自分自身が住んでいる地域への愛着といったポジティブな要因によって高められるのかを検討した。

まず、防犯ボランティア歴による得点の違いを見ていくと、防犯ボランティア歴10年以内と防犯ボランティア歴11年以上で、防犯ボランティアへの参加動機づけ得点に差が見られた。防犯ボランティア歴11年以上の群の防犯ボランティアへの参加動機づけ得点が高かった。防犯ボランティア10年以内の群と11年以上の群では、防犯ボランティアへの参加動機づけにおいて、質的に異なることが推測されたため、2つの群に分け、分析を行なった。

次に、犯罪不安と地域への愛着が防犯ボランティアへの参加動機づけに与える影響を検討した。防犯ボランティア歴が相対的に短い防犯ボランティア歴10年以内の群の場合、居住する地域への愛着が防犯ボランティアへの参加動機づけを促進することが明らかとなった。

一方、相対的にボランティア歴が長い防犯ボランティア歴11年以上の群の場合、居住する地域への愛着だけでなく、犯罪不安も防犯ボランティアへの参加動機づけを促進することが明らかとなった。

したがって、防犯ボランティアに関わっている参加歴によって、防犯ボランティア活動への参加

動機づけを高める要因が異なることが明らかとなった。

相対的に防犯ボランティア歴が短い場合や、新規で活動に参加する防犯ボランティアの構成員の場合には、居住地域への愛着を意識することが動機づけを高めると言える。ソーシャルキャピタルの促進（松川・立木, 2011）に関するような取り組みが必要と考えられる。

相対的に防犯ボランティア歴が長い場合にも、居住地域への愛着を意識することが重要であるがそれに加えて、犯罪不安に焦点を当てる必要であると言える。荒井・藤・吉田（2010）では、ニュース等のマスコミ報道の内容を身近に感じる程度を視聴内容から受けるインパクトとして分析している。そのインパクトが犯罪不安を高めていることが明らかとなっている。つまり、居住地域や居住地域の近接地において、どのような犯罪が起きているのか、その犯罪被害の実態を知ることと、それを自分事として捉えることが犯罪不安を高める。防犯ボランティア歴が相対的に長い群において、犯罪への不安が防犯活動への参加動機づけを促していたのは、上記のような結果（荒井・藤・吉田, 2010）によると言えるだろう。

防犯ボランティア歴が相対的に長くなってきた構成員には、地域で起きた犯罪被害の実態や地域で起きた最新の犯罪統計などを学習する機会を設けることが防犯ボランティアへの参加動機づけを高める上で有効と考えられる。

以上のことから、防犯ボランティア歴の長短によって、防犯ボランティアへの参加動機づけを高める要因が異なることを踏まえる必要がある。その上で、防犯ボランティア活動の活性化に向けた取り組みを考える必要がある。

防犯と教育の接続に向けて 防犯ボランティアに対する動機づけを高め、防犯ボランティア活動を活性化していくためには、今後どのような実践が考えられるだろうか。

第一著者が居住する静岡県の犯罪（静岡県警察本部, 2020）を見ると、県内の刑法犯認知件数は年々減少している。刑法犯の認知件数の水準が低く、犯罪の発生状況が年々落ち込んでいる。犯罪が低水準で落ち込んでいる現状において、犯罪不安

に焦点を当てながら、刑法犯認知件数の低下を目的に防犯ボランティア活動をしても、なかなか成果を感じにくいだろう。刑法犯認知件数が低水準で推移している社会状況においては、防犯ボランティア活動に取り組む目的と意義を刑法犯認知件数の低下とは異なる部分にも置くことで、活動の活性化が可能になると考えられる。

先行研究では、防犯ボランティアの活動を活性化する上で以下2つが指摘されている。

1つ目は、防犯ボランティアの活動内容を1つに絞らず、多様な内容の活動を行うことでマンネリ化を防ぎ、防犯ボランティアの活動に参加してもらうことで成果を実感してもらうことが必要である（大久保・垣見・太田・山地・高地・森田・久保田・白松・金子・岡田, 2018）。

2つ目は、防犯ボランティア活動への意欲低下を防ぐために、活動の効果を実感できることが重要である（小俣・芝田・浅川・羽生・原田, 2011）。

上述した2つの先行研究の指摘を踏まえながら本研究結果を解釈していく。

結果の表5に示した防犯ボランティアの活動内容を見ると、防犯ボランティア10年以内の群、11年以上の群、どちらの群も防犯パトロールの活動に参加している割合は高かった。防犯パトロールのような活動1つだけでなく、それ以外の防犯活動にも防犯ボランティアの構成員が参加していくことが求められる。防犯活動に参加することで、防犯ボランティア構成員がその効果を実感できる活動であることも求められる。さらに、本研究結果から明らかにされた知見を加えれば、防犯ボランティア歴が浅い群の場合には地域への愛着を促進すること、防犯ボランティア歴が長い群の場合には、地域における犯罪の現状を学習することが必要である。

小俣・芝田・浅川・羽生・原田, (2011)は、活動の効果を実感できるプロジェクトとしていくつか挙げているが、その中に住民全体の防犯意識・関心の向上の取り組みがある。防犯意識・関心を向上させる具体的な取り組みとして、例えば、小中学生を対象とした防犯教育がある。子どもを対象とした防犯教育のねらいで重要なのは、危険を未然に予知し、子どもが自分で自分の安全を守れるよう

な力を身につけることである（藤井, 2010）。岡本・桐生(2006)は、子どもが犯罪被害者にならないようにするための実践例を紹介している。子どもを対象とした防犯教育の一番のねらいは、子どもが被害者にならないようにするためであり、そのため見知らぬ人に声をかけられたときの対応や登下校時の防犯対策に必要なことを子どもに伝えることも重要である。しかし、それだけでなく、地域で起きている犯罪の実態を知り、それを身近なものとして捉えることや、地域で起きている犯罪から社会の仕組みを知るような防犯教育のあり方も考えられる。

例えば、防犯ボランティアの構成員が小中学校に出向き、小中学生を対象に、地域で発生している犯罪の実態を、犯罪統計や具体的な手口をもとに説明したり、刑法についての説明を行ったりする。小中学生は、犯罪を通して居住する地域の実態や社会の仕組みを学ぶことができる。

2015年に学校教育法が改正され、2016年から、小中一体型の施設で小中学生が9年間一貫したカリキュラムで学ぶ義務教育学校が全国の都道府県で増えつつある。義務教育学校では、小学校高学年からの独自教科の導入など、カリキュラム編成上の工夫が求められる（文部科学省, 2015. pp.5-6）。

第一著者が居住する静岡市における静岡型小中一貫教育では、「しづおか学」、「英語力向上」などの特徴を持たせたカリキュラムと「地域と連携した教育」、「9年間で目指す子どもの姿の共有」などが具体的な取り組みが想定されている（静岡市教育委員会, 2020）。静岡市的小中一貫教育のカリキュラムを例に防犯教育を考えると、独自科目としての「しづおか学」の中に、犯罪を通して地域を学ぶという内容を位置づける。そこに防犯ボランティアが授業者として学校に関わり、防犯教育を行う取り組みは可能だろう。小中学生は、自分事として地域の犯罪を理解できる。それは、犯罪に対するインパクト（荒井・藤・吉田, 2010）を高める防犯教育でもあるだろう。

このような実践によって、学校の先生（教える側）と児童・生徒（学ぶ側）という関係だけでなく、地域の防犯ボランティア（教える側）と児童・生徒（学ぶ側）、地域の防犯ボランティア（教える側）と教

職員（学ぶ側）という新しい関係が学校内に作られる。学校で防犯に関する授業を行うために、防犯ボランティア構成員は、地域で発生している犯罪の実態を学習する必要がある。小中学生が学んだ成果を防犯ボランティアにフィードバックすれば、防犯ボランティアの構成員はその手応えを感じることができ。防犯活動による成果を感じることができれば、防犯ボランティア活動に関わる構成員の動機づけを維持することが可能かもしれない。さらに、地域の小中学生を対象とした防犯教育によって地域貢献ができているという実感を防犯ボランティア構成員が持てるようになることで、構成員の地域への愛着を高めることもできるだろう。

新しい関係が作られたり、関係の質が変わったりすることで発達が動き出していく（赤木、2021）。防犯ボランティアの活動を教育と結びつけ、小中学校の中に新しい関係が作られるることは、赤木（2021）の考え方にもとづくと、防犯ボランティア、学校、児童・生徒、3者にとって発達の契機となると言えるだろう。防犯ボランティアの構成員は、学校教育を通した防犯活動からの手応えを感じながら、地域への愛着を高め、防犯活動を活性化させることができる。学校と児童・生徒は、地域の人から犯罪を学ぶことで、犯罪を通して地域や社会の仕組みを学ぶことができる。子ども達が犯罪を通して地域を理解していくれば、将来、地域の防犯ボランティアを担う大人となっていくことも考えられる。

防犯ボランティアの活動を活性化させるための具体的な取り組みを、警察、学校、地域を巻き込んだ実践として行い、その効果を実証的に検証していく実践的研究が、防犯ボランティアや防犯教育の展望として考えられるだろう。

5.引用文献

赤木和重（2021）。生徒を変えるのではなく、関係を変える-人間の発達の動きだしについて- 時岡晴美・大久保智生・岡田涼・平田俊治（編著）
地域と協働する学校-中学校の実践から読み解く思春期の子どもと地域の大人のかかわり-
(pp168-175) 福村出版

荒井崇史・藤桂・吉田富二雄（2010）。犯罪情報が幼児を持つ母親の犯罪不安に及ぼす影響 心理

- 学研究, 81(4), pp397-405.
- 荒井崇史（2017）。防犯ボランティア 日本犯罪心理学会（編）犯罪心理学事典（pp.590-591）.丸善
- 藤井義久（2010）。小学生の犯罪不安と防犯意識に関する発達心理学的研究, 21, 375-385.
- 石盛真徳（2004）。コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発を通じて コミュニティ心理学, 7(2), 87-98.
- 松川杏寧・立木茂雄（2011）。ソーシャルキャピタルの視点から見た地域の安全・安心に関する実証的研究 地域安全学論文集, 14, 27-36.
- 文部科学省（2015）。小中一貫教育制度導入に係る学校教育法等の一部を改正する法律について（通知）
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/_iicsFile/afieldfile/2015/08/06/1360758_01_3_1.pdf
(最終アクセス日時：2021年11月16日)
- 警察庁（2020）。防犯ボランティア団体の活動状況等について
<https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki55/news/doc/20200501.pdf>
(最終アクセス日時：2021年11月30日)
- 桐生正幸（2015）。地域防犯活動における高齢者ボランティアの意識調査 東洋大学21世紀ヒューマン・インターラクション・リサーチセンター研究年報, 12,13-20.
- 永房典之（2008）。犯罪に対する不安感等に関する調査研究(2) -防犯対策と犯罪被害経験・犯罪不安・犯罪リスク知覚の関係- 社会安全, 70, 17-29.
- 小俣謙二・島田貴仁・羽生和紀・原田 章（2009）。住民による防犯活動の実態調査 犯罪心理学研究, 47 (特別号), 122-123.
- 小俣謙二・芝田征司・浅川達人・羽生和紀・原田 章・島田貴仁（2011）。無理のない、持続可能な防犯活動を実現するための提言 <<http://www.skre.jp/>>,9p.
- http://www.skre.jp/nc2/index.php?action=multidatabase_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=61&metadata_id=14
(最終アクセス日時：2021年11月30日)
- 岡本拡子・桐生正幸（編著）（2006）。幼い子ども

- を犯罪から守る 北大路書房
大久保智生・垣見真博・太田一成・山地秀一・高地
真由・森田浩充・久保田真功・白松 賢・金子泰
之・岡田 涼 (2018). 香川県における防犯ボラ
ンティアの活動内容と課題の検討：ボランティ
アへの参加動機と援助成果、地域との交流との
関連から 香川大学生涯学習教育研究センター
研究報告, 23, 65-74.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2004). 地域住民
におけるボランティア活動への参加動機と満足
感の関連性 東京保健科学学会誌, 7, 17-24.
- 静岡県警察本部 (2020). 静岡県の犯罪
<http://www.pref.shizuoka.jp/police/kurashi/nenkan/documents/r2shizuokakennohanzai.pdf>
(最終アクセス日時：2021年11月30日)
- 静岡市教育委員会 (2020). 静岡型小中一貫教育
リーフレット Ver.3
<https://www.city.shizuoka.lg.jp/000876874.pdf>
(最終アクセス日時：2021年11月22日)
- 鈴木春菜・藤井聰 (2008). 地域愛着が地域への協
力行動に及ぼす影響に関する研究 土木計画学
研究論文集, 25 (2), 357-362.

付記 本研究は、日工組社会安全研究財団2017年
度一般研究助成を受けたものである。